
ぬばたまの求婚

あこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぬばたまの求婚

【Nコード】

N4289U

【作者名】

あこ

【あらすじ】

ユラの上司は、人も羨む鴉の濡れ羽色の艶髪を持ち主（♂）。

その彼の髪の毛が、ある日突然、バツサリ散切り（ざんぎり）頭に！

一体全体、昨夜の彼に何があったというのか。

その1（前書き）

ざっくり世界観のなんちゃって異世界が舞台です。
突っ込みは嚙下してスルーしていただけるとありがたいです。

その1

「……………！！！！」

一目その切り口を見るなり絶句したわたしの反応など意に介さず、直属の上司であるフロレスタン室長は、無言のまま目を部下からはずし、地下蔵書庫へと続く薄暗い階段へと姿を消した。

「……………なにあれっ！！！！」

一体全体、上司に何が起こったのか。

枝毛や切れ毛の疑いなど常に見当たらない、腰まである鴉の濡れ羽色の長髪。

その長さでどうしたらそんな艶髪を保持できるのか、男のくせに必要なのか！と、女性なら誰しも悔しがらずにはいられない美しい髪。その持ち主が、王立図書館に勤務するわたしの直属の上司、古代禁出文書管理室長フロレスタンであった。そのはずなのに。

昨日までは麗しく背中を流れ腰を覆っていたはずの黒髪は、肩口のあたりから背中にかけて、見事なまでにバツサリと斜めに断ち切られていた。

……………切るにしたって切りようってもんがあるでしょうが！！！！

職員専用の地下入り口階段前で見事に茫然自失、薄暗闇を睨んで立ち尽くしながら、上司の黒髪とそれにかけられた労力とを惜しみ、うつすらと涙を浮かべた。

詳しいことは知らないが、わたしの上司は名門貴族出身らしい。身分も容姿も平々凡々なわたしとは天と地ほどの違いがある。

身分だけではない。彼が持っていたのは、一年半かかってようやく肩までの長さから背中の中半ばまで伸ばした、枝毛や切れ毛が山ほどあるわたしの薄茶色の髪とは大違いの艶髪だったのだ。

きっと身の周りの世話をする人達によつて、精魂込めて手入れされていたであろう。その真つ直ぐな黒髪が、なんと無惨な姿になり果てたのであろうか。

本人は深い意味もなく伸ばしっぱなしにしていただけかもしれないけれど、手入れする側はとてつもなく気を遣つてあの芸術品を仕上げていたに違いないのに。

一体全体何故に？

どうやったらあんなバツサリ斜め散切りな事態に！？

事態を推測するべく、変わった様子がなかったか、前の日を思い出してみる。

昨日はいつもと同じように朝から同じ地下二階でそれぞれの仕事をし、昼食と午後のお茶の際、一緒に休憩をとった。夕刻、仕事を終えて別れるまで、別段異常はなかったように思う。

家、いやお屋敷で何かあったのか？

それとも暴漢に襲われた？

確かに髪の美しさのみならず麗しい顔立ちをしている点は否めない。本人も周囲も詳しく語らないのでよく知らないのだが、身分も相当高貴な方のようにだ。

しかし、整った顔立ちや長身という恵まれた容姿や華やかと思われ

る身分とは真逆を行く表情の暗さというか変化の乏しさ、更には雰囲気のおどろおどろしさによって、浅慮にも寄って来る無謀な者は人どころか獣にも殆どいない。

迂闊に近づくとその暗さに巻き込まれて生きる氣力が奪われる、と、王立図書館内では専らの評判だ。

常識はずれの艶やかさを保つ黒髪は、一般的な成人男性の平均的な長さどころか、女性の長さすらも超えようとしていた。その輝きは艶やかというよりまがましいといった方が近く、古代文書の記述にあった、夜になると髪が伸びる呪いの人形を彷彿とさせる。

日の光が苦手だという色白の肌や色素の薄い水色の瞳を保護する為に着用していると言っていた丈の長い暗色の衣装（帽子付き）をズルズルと引きずって移動する姿は、古代の呪術師が蘇ってきたかのような錯覚を見る者に沸き上がらせ、まず近づこうという氣を起させない。

上等な布地独特の質感が、余計に呪術の凄さを物語るかのように衣擦れの音をおどろおどろしいものにしていたせいもある。

一般庶民平均的価値観の持ち主代表のわたしことユラ・ブレイズが、フロレスタン室長の直属の部下として配属され、前触れなしに上司に遭遇してもぎよつとしない程度に慣れるまでにかかった時間は3ヶ月。呪わしい長髪が実は手をかけられた艶髪だと気づくまでには半年を要した。

一年以上経った今でも、表情の変化に乏しい上司が真顔で繰り出す冗談とも本気ともつかない言動への対処には未だに手こずっている。仮面の様に表情筋が退化したとしか思えない上司が、大笑いしているのを見たことは、一度もない。

彼の表情の基本は真摯な真顔で、眉間に皺が寄るか目を細めるかするの、主たる追加効果だ。

黒髪や彫りの深さがもたらす陰影によって、真顔どころか渋面に見

える付加効果もついてくる。

古代文書の解析が思うように進まず苛立っている時も、休憩時に好みのお菓子を出された時も、改心の出来とも言うべき翻訳文を上司に提出した時も、大体似たような反応だった。

先ほどユラの視線から逃れるように地下階段へ消えていったフロレスタン室長も、いつもと変わらぬ表情だっただろうか。散切り頭にはかり気を取られていたが、その表情を思いだそうと試みるにつれ、なんだか自分の記憶力は信用ならないと思えてならなかった。

まさか。

まさかあのフロレスタン室長が目潤ませていたなんて。

どう考えても錯覚だとは思えない。

視力には自信があるつもりだったが、連日の地下での作業ばかりで薄茶色の瞳も疲労しているのかもしれない。

ともあれ、階段入り口でいつまでも逡巡しては仕事に差し障りが出る。ちよつとぐらいの視力の低下ぐらい何さ、とっとと仕事に行かなくては。

はたと自分が出勤途中であったことを思い出し、少々困惑しながらも地下へ足を踏み入れようとした矢先、聞き慣れた足音が騒々しく近付いてくるのが耳に届いて体が硬直してしまった。

王立図書館の勤務者に、あれほど騒々しく歩く者はいない。

職員専用の出入り口がある部屋まで、足音も高らかに迷いなくやってくる人物の心当たりは、ひとつしかなかった。

その2

地下へ向かう為の状態で固まっていた足を即座に引っ込め、勢い良く開けられた扉へと体を向ける。

足音の持ち主は予想通り、上司の自称幼なじみ兼親友である、レスター中将だった。

放っておいたらいつまでも地下に籠もっている呪いの人形を虫干しすると声高に宣言しては、無理矢理にでも太陽の下に引きずり出すのが俺の使命、と明言してはばからない。時には無関係の部下^{わたし}をも巻き込んで、庭園でお茶をしたり遠出に連れ出したりと、豪放磊落かつ明朗な人柄を持つ根っからの体育会系人間だ。つまり、室長とは真逆のタイプ。

それでも、自称幼なじみ兼親友だけあって、情報の共有度や室長の仮面表情に対する解析能力は驚くほど高い。

そんな人が駆けつけてくれたとは心強い！

「レレレレレレ、レスター中将——っ！見ましたか！？見たんですよね！？室長のあの髪っつなんですかあの散切り頭っ何があったんですかあっ！？」

勢い込んで、おそらくは全てを知る男へと情報開示を要請する。

「何が…ってか、もとはといえばユラちゃんが教えたんだろ？」

三十路間近のこの独身男性は、爆弾発言をこともなげに言っただけ。しかも軽々と。こちらは非常事態宣言が先ほどから脳内をぐるぐるぐるぐる駆け巡っているというのに。

なのに、何を教えたせいであなったと言っんだ！

「何をです？」

心当たりは全く無いんですが！

「失恋したら長い髪をバツサリ切って思いも断ち切るのが定番って……一年前くらいユラちゃんもバツサリ切ってたじゃん。肩下ぐらいまで」

軽い口調で言いながらも目つきが厳しいのは気のせいですか。
もしかして、余計なこと教えやがって、とか恨まれてますか！？
確かに失恋して髪をバツサリいった時に女子限定儀式ですとは言いませんでしたけど。

「それは……女の子の場合のみに適用されるのはあまりにも常識だ
と思ったので、確かに室長に詳しい説明はしなかったですけど……
……じゃ、なくて、えっ失恋！？ 室長が失恋！？ いつ、昨日！
？ 昨夜室長に何がつ」

「……………あれ？」

「まさかあの室長が失恋！？ 相手は！？ ああああ、もしかして
名うての呪術師に目を付けられてしまったと誤解されて、こっぴど
く振られたとか？ 女であることが恥ずかしくなるくらい綺麗な髪
と顔の男なんてゴメンよ、って言われてこんな髪切ってやるって
なったとか？ いやいや室長に限ってそんな短慮は……」

驚愕のあまりまくしたてる口調に若干引き気味のように見受けられるのは気のせいでしょうか。

「えーっと、……やっぱりユラちゃんもゴメンなの？」

「いえ、わたしは別段ゴメンというわけではないです。ないですけど、隣にいますと時々いたたまれなくはなりますね。顔はおるか肌の白さや肌理の細かさまで、勝負するまでもなく完敗ですし。

でも、呪いの如く整った容姿だけじゃない室長の良さも、わたし、ちゃんと知ってますから！」

そうよ、採用面接試験で出会ってからもうすぐ二年、伊達に来る日も来る日も助手としておそばにいたわけではありません。

「あいつの良さねえ。うん、ないわけじゃないけど伝わりにくいよなあ」

自称幼なじみ兼親友ともあるうお方が、しみじみとなんたる言いぐさ！

確かに根暗な雰囲気には覆い隠されまくった室長の良さは、伝わりにくいどころか見て見ぬ振りをされてしまいそんな空気の悪さをまとっていらつしゃいますけど。

助手として部下として、単なる見てくれ美青年の有能根暗ではないと、わたしは理解してますよ！ と声を大にして主張しておくところでしょうここは。

「レスター中将、大丈夫です、室長の良さはわたしでもわかるんですから、いつか必ずや大勢の方が認識してくださる日が来ます！ 表情筋の運動が壊滅的で感情の揺れ幅がわかりにくい方ですけど、弱き者の環境の為に静かに空気を震わせて怒ってくれたり、参っている相手を労ることをちゃんと知っている、優しい方ですよ。寝食を忘れて没頭しちゃうほどの古代文書への深い愛の持ち主で、

休憩時間すら惜しいはずなのに、部下には働きすぎないよう適度に休憩を取るようちゃんと気を遣ってくれるんです。

そういう室長のいいところ、時間をかけて理解しあえば、超えられない壁はないと思います！

だから失恋で髪の毛を切るより先に戦略を変えて再度挑戦をするべきだったのではないかとレスター中將から室長に……」

言ってあげてください、まで言えなかった。

ふつと穏やかにゆるんだ瞳が背後へと視線を移したことに気づいたからだ。

「……………だとよ、グレイ」

ふいに呼ばれたフロレスタン室長の愛称。ガバリと振り返れば、地下へと続く階段の入り口を塞ぐかのように壁により掛かる無言の大型呪い人形……ではなく、フロレスタン室長！

「……………」

「んぎゃーっ室長っいつからそこに！？ すみませんすみません、完全に遅刻ですよね、すぐに昨日の続きの翻訳から始めますから！」

「……………翻訳ではなく、再度の挑戦から始めることにする」

年齢以上に深みのある声が形の良い唇から零れ落ちた。

「えーと、一時的放置のつもりが1ヶ月手付かずのままの例の古代文書にまた手を着けるってことでしょうか？ 了解です、至急資料をご用意いたします！」

これでも有能な部下ですからね、遅れた分の仕事を取り戻すべく、サクサクキビキビ働きますよ。

そう決意して地下階段へと足を踏み入れつつ、まさか室長は失恋の痛手をバネにして仕事を極めるおつもりではないかと心配になる。いやでもそういう事態にならぬように諫め役のレスター中将が来たんだらうからおそらく大丈夫だ。

安心して古代文書読解の準備をしよう。

レスター中将、あとは頼みました！

心の中で声援を送るわたしの耳に、階段入り口で交わされた二人の会話が聞こえてくる。

「敵はなかなか手強いようだ。心してかかれ。なるべく率直に。分かり易くを心がける」

「……………言われるまでもない」

仕事奨励してるしーっ！

仕方ない、今日は働きすぎないようわたしが見張ることにしよう。大体にして、フロレスタン室長の翻訳は実用向きに簡略且つ分かり易いから大丈夫ですよ、レスター中将。

あれ？途中放棄していた古代文書って、兵法書だったかなあ？

疑問に思いながら、薄暗い階段を踏み外さない程度の駆け足で、いつもの仕事場へと向かった。

その3

「昨日の続きだ。座りなさい」

あれ？ 古代文書解読にとりかかるんじゃない？

わたたと資料を山積みにしていたわたしを凍てつくような視線で制止させ、いつも休憩時に利用する書架横の長椅子へと誘導する背中、大人しく従った。

「確認しておきたいのだが」

「はい」

「一度求婚を断られたからといって、髪を切るべきではなかったというのがそなたの言い分なのだな？」

「ええっなんですかいきなり！？」

仕事の話かと思いきや思いっきり私的用件ですか！？

なんでわたしが室長の恋愛相談を請け負わねばならぬのか。恋多き男と噂されるレスター中将の方が適任ではないでしょうか。

女心を尋ねられても、貴族のご令嬢相手の凡例はわかりかね……そうか、まさかの身分違いの恋！？

うん、心当たりはなくてもない。

時々室長のご実家からつかわされて差し入れを持ってくる女中さん

（美人）、まじまじと室長を見ては微笑んでいたもんなあ。いつもわたしにも笑いかけてくれて、グレイロディアス様を宜しくね、って言われたことも一度だけある。両手をひしっと掴まれ潤んだ瞳で、ただか新人の部下に宜しくなんて何を宜しくされたのか？ 足を引っ張るなっていう意味での遠回しな脅迫？ と疑問に思っていたけれど、ここにきて腑に落ちた。

あれは、単に自分のご主人様が快適な研究生活を送れるように宜しく、というだけではなく、想い人である男性に変なムシがつかないように宜しくされたに違いない。

大丈夫ですよ室長、彼女とはちゃんと両思いです！ 越えられない身分の壁が…、と奥ゆかしい女中さんは遠慮したただけなんだと思いますよ。重ね重ね誠意を見せるべく説得すれば、いずれ二人の思いは結ばれます！

「ユラ、人の話を聞いているか？」

「はっごめんなさい、そうですねえ、もしかしたら彼女と室長との間に何か誤解があったのかもしれませんが。髪を切るというのは早まった行為だったんではないでしょうか」

「……………彼女？」

「何度でも誠意を尽くして説き伏せてこそ、成就した際の喜びも大きいというものです。くじけないで頑張ってください！ さしあたってその散切り頭を切りそろえてもう一度迫ってみてはいかがでしょうか」

「ふむ、一理あるな」

「でしょう？　もしかしてその髪、ご自分で刃をあてたんですか？
いくらなんでもあんまりな切り口です、呪い度が通常比八割り増
しですよ」

「……………」

「レスター中将がまだその辺にいるかもしれません。やたら切れ味の
鋭い刃物をお持ちですから、お借りしてきましようね」

「待て」

立ち上がって地上へ向かおうとするわたしの手をとった室長は、何
故か片膝をついた体勢で跪いた。

「お主の意見をいれるにしても、やはり切るより先にすべきだと思
う」

「は？　何を」

「求婚だ」

「球根？」

「そつだ」

「植物園の園長からまたなんか変なもの貰ったんですか？　引っこ
抜くと気持ち悪い声で鳴く植物とか、食虫通り越して小鳥まで食べ
そうな肉食植物とか、図書館前の花壇には相応しくありませんからね
！」

「……………婚姻を乞うという意味だ」

「こんいん？ 根因…こんい…婚姻？ 求婚ですか！？ いや…室長がどうしてもっていうなら切りそろえるのは再チャレンジの後でも……………って、何してるんです！？」

おもむろにわたしの指先を口元に近づけた室長は、殺意さえ感じられる狩人のような視線で、わたしを射抜いた。
えっ獲物はわたし？

室長は絶対草食系だと思ってたのにーっ。じゃなくて。落ち着けわたし！

「ユラ・ブレイズ。昨日申したことを再度繰り返す」

「は？ 昨日？」

「気持ちが行先したせいで正式な儀礼をとらなかったのはこちらの非だ。今日こそは本気であることを理解してもらおう」

「はい？ へ？」

「そなたと結婚する栄誉を与えてはくれまいか」

「……………マジですか」

「それは是か否かどちらの意味だ？」

俗語はよくわからん、と少しだけ眉根を寄せる室長の顔を凝視しつつ、求婚されていたらしい昨日を思い出すべく記憶の糸を手繰り寄

せた。

その4

昨日の昼下がりに。

昼食と一緒に例の美人女中さんが持ってきて下さった籐の籠を持って、休憩の準備をするべく仕事の手を止めた。

いつものごとく、わたしの分まで用意されていた焼き菓子をテーブルに準備し、午後のお茶の時間を上司に告げる。

これまた室長のお家の方が用意してくれる高級茶葉で香り高いお茶を淹れ、今手がけている古代文書について室長の意見を聞いた。話の流れで、室長と同じ歴史学研究者でもあった曾祖父の研究論文が、王宮の中にある禁書庫、すなわち持ち出し及び関係者以外閲覧禁止の貴重な蔵書ばかりが収められた書庫に眠っていると知る。自由に閲覧出来る身分を持つらしい室長を、素直に羨んだ。

「王立図書館の一職員、しかもペーパーじゃ閲覧は夢のまた夢ですけど、その書庫にある古代文書をいつかは読んでみたいです」

「そうか。ならば結婚するか？」

「はあ？ ああ、フロレスタン室長の奥方様になれば見られるんですか。どれだけの身分があれば閲覧可能なのかよくわかりませんが、配偶者にも適用になるんですか？」

へええ。それは確かに魅力的なお誘いですけど、一般庶民のわたしがそんな裏技使って見て良いものでもないですね。その為に厳重管理されているわけですし」

「……………」

「室長、ご自分の身分に頓着なさらないのは知ってますけど、冗談

はよく考えて発言してください。軽々しく結婚するか、なんて、婚活のご令嬢相手じゃ本気にされて一気に婚約即婚姻に持ち込まれちゃいますよ」

「……それでは、ユラは結婚しないというのだな？」

「当たり前です！ 冗談だってちゃんとわかってますし、婚活中でもないですからね」

「そうか、わかった」

「一応言っておきますけど、そういうことを軽々しく口にしたら駄目なんですよ？」

「……………」

「室長、世間一般の常識に疎いすもんねえ。世俗を超越して研究に没頭したい気持ちもわかります。けど、いつかは相応の身分のご令嬢との縁談があるんでしょうから、もっと……………」

「戻る」

世間一般常識を説こうとして逃げられるのは初めてではない。自分の世間知らずを突きつけられて耳の痛そうな顔をするのも。だから、気にも止めていなかった。

あれが本気の求婚だったなんて、気づきもしなかった！

しかも休憩中の他愛もない世間話の流れだよ！？
それで気付いて方が無理でしょう。

「そりゃあ冗談かと思うじゃないですか」

「だから今誤解を解くと共に、改めて求婚している」

「……………」

何故わたしに。

呪われた空気はともかく、顔よし身分高し性格…は、まあ、根暗なりにいいとこありますけど、とにかく一般庶民の一部下であるわたしを相手にするようなお方ではないでしょうが。

今鏡を見たら、相当困った顔をしている自信がある。
硬直しているわたしの指先を親指の腹でそつと撫で、室長が更に言葉を紡いだ。

「そなたが言ったのだ」

は？

「重ねて説けばいつかは成就する、と」

ええええっそういうつもりで言ったんじゃないんだけどなあ。

「一度や二度拒絶されたからといって、諦めるべきではないと言ったではないか。わたしもそう思う。」

自分が他人にとって疎ましき存在であることは、薄々わかっている。しかし、どれだけ根暗だ世間知らずだと罵倒され拒絶されようと、これだけは譲れぬ」

「いや、そこまで室長を拒絶したわけでは……………」

あたかも自らの人間性を否定するかのような口振りだったので、自虐的な発言を遮るようにフォローの言葉を口にした瞬間に後悔した。

だって、呪いの大型人形…じゃなかった、室長の目の奥がキラリと光ったのが見えて、背筋が凍り付きそうになったから。
いいいいいいいやな予感がする！

その5

「拒絶をしていないというならば、求婚を受け入れるということか？」

首を傾げた室長の肩から、散切り状態の黒髪がバラバラとこぼれ落ちる。これが首を傾げた子犬なら可愛いのに。どう見てもぎこちなく動くからくり人形だ。

それにしても、散切りになっても艶はなくならないんだなあ。羨ましい。

いやいや髪の色に見とれてる場合ではなくて。

そういう意味で言ったんじゃないんです、と誤解を訂正せねば！

「求婚を受け入れるのは無理なんですけど、室長という人間を拒絶しているわけではない、と言いたかっただけです」

傾げた首をギギギ、と戻したからくり人形…ではなく室長は、またしても凍える視線で刺すようにわたしを見上げる。

ひいっ滅多にないアングルだから余計心臓に悪い！

「……………わたしを拒絶していないというのであれば、何故求婚を受け入れられないのか、簡略かつ明瞭に説明しなさい」

どえええっこんな時にまで上司口調ですか！？

意見を述べるときは簡略かつ明瞭に。研究論文でもそれを心がけること。

一年半余り、助手として部下として、時には生徒として、そう教育されてきた。

頭の中をぐるぐると色んな考えがかけめぐり、簡略かつ明瞭な答えなんて無理無理無理、と泣きそうになる。

室長の人となりは嫌いどころかむしろ好きですよ。

磨き抜かれた殺人的な美貌の持ち主なのに、その容姿にそぐわぬ頑固なペンだこができている指先は、仕事に真剣に取り組む証だと尊敬してます。

性格もある程度慣れてしまえば害の無いものですし、たとえ根暗であろつとまがまがしい雰囲気をもとていようと、歩く姿を見た愛玩犬がしつぱ巻いて逃げ出そうとも、個性だと思えば思えます。

でも、わたしが知っているフロレスタン室長は、彼という人間を構成するごく一部の情報に過ぎないわけで。

グレイロディアス・なんちゃらかんちゃら・フロレスタンとかいう御大層な名前を持つらしいお偉い身分の方、となると、はつきり言っ
てわたしの手に余る。

末流貴族でさえ遠い世界の方だと思っているのに、それが名門貴族たぶんのご子息から、求婚？

無理無理無理。

絶対無理。

庶民から玉の輿、つてのも広い世間では全く無いわけじゃないみたいだけど、わたしの柄じゃない。

何代か前の国王陛下が門閥貴族の反対を押し切って実力登用主義を断行した結果、一昔前に比べたら随分と身分の差という壁は薄れているのだと思う。だとしても、その壁は無くなったわけではない。歴然とその存在感を主張している。

室長と女中のお姉さんの間に愛があると思ったから、越えられると励ましたのであって、わたしじゃ無理だ。

わたしと室長の間に、燃え盛る恋だの愛だのの炎はないのだから。

わたしは王立図書館の一職員であるユラ・ブレイズで十分満足してる。

それ以上は分不相応だし、想像も出来ない。

フロレスタン室長もレスター中将も、それを感じさせぬ扱いをしてくれているから忘れがちだけど、住む世界が違うんだ。
だから、絶対に相容れないと思います。

……でも、それを言ったら室長は傷つくかな？
あの薄氷色の瞳が、また潤んでしまうのかも？

なるべくフロレスタン室長を傷つけないように、婉曲表現でお断りをしなくては。ただし簡略かつ明瞭に！
ぐるぐると考えを巡らせながら室長の顔を見れば、答えを待つ表情は深刻な上に早くしろと無言の脅迫を視線でビシバシ放つ。
わわわわ、待たして焦らして期待をさせてるんじゃないんです！
とりあえずお断りの理由を総括して告げるべく焦って口を開く。

「ごめんなさい、よく知らない人との結婚は出来ません！」

「……一年以上共に過ごしてなお、知らぬ者と申すのか？」

わーん、また表現間違えた！？

論文を提出する度要約が的外れだと何度も指摘されたトラウマが蘇えりそう……。

「すみませんすみません、これはですね、比喻表現というか暗喩的な……」

弁解しようとするわたしをさえぎるようにフロレスタン室長は息を吐き出す。

溜め息！？ 国語力の不足に溜め息！？

「……そうだな、意図した結果ではないが、そなたはわたしの本名を知らぬであらう」

「ああ、そういえばそうですね。随分とややこしいお名前をお持ちらしいというのはレスター中將から聞いて知ってますが……あれ、室長から直接は聞いたこと無いですよ？ わたしが忘れてるだけですか？」

「言った覚えはない。一年以上ここに勤めながら、偶然にも誰一人そなたの耳に入れなかったことが驚きだが、かえって良かったのやも知れぬ。」

正式に求婚するからには、わたしの口から正式な名を名乗ろう」

「は？ですから求婚されても……」

わたしの言葉なんてお構いなしに、きらきらというよりギラギラした目にわたしの薄茶色の瞳を真っ直ぐ見つめられて落ち着かない気分になったので少し視線を落とす。

形の良い薄い唇がゆっくりと言葉を紡ぎ出すのを、どぎまぎしながら見つめ返した。

「汝の豊穠たる大地の如き瞳に囚われ、瑞々しき果実の唇を奪いたいと欲する者、我が名はグレイロディアス・ドライベル・フロレンス・フロレスタン・ディ・ディオ・リリエントール。」

汝の虜であり僕であらんと欲す。どうか生涯の伴侶という栄誉を与

えたまえ」

………いろいろな突っ込みどころが多すぎて、
情報処理能力が追いつきません！

その6

瞳やら果実の唇やらシモベやらのくだりは、もう、この際スルー。問題は、名乗った正式名とやらのグレイロディアス・ドライベル・フロレンス・フロレスタン以降。

『ディ・ディオ・リリエントール』

『ディ・ディオ』は家名の前について男性貴族であることを示す称号。

『リリエントール』は……………それって、この国の王家の家名じゃなかった？

王として即位すると、リリエントールの後に国名を連ねることになる。

と、いうことは。

「えっ室長王族だったんですか!？」

「とるに足らぬ末席の身だ」

「いやいやいや末席とか関係ないですしっ」

王族って、外交とか社交とか、いろいろと義務があるんじゃないの？ どうして王宮に近いとはいえあくまでも王宮外の王立図書館くんだりまで毎日朝早くから出勤し、夜遅くまで入り浸ってるわけ？ 研究好きは本当なんだろうけど、許されることなの？

混乱した勢いのまま、そうまくし立てると室長はわずかに首を振っ

て応えた。

「問題ない。とるに足らぬ身だと言った。現国王陛下の下には一体何人の弟妹がいると思う？」

「えーっと、沢山……」

数年前に崩御された先王様と現王太后様の間には、現国王陛下を筆頭に七人のお子様がいらっしゃった。

女のお子様方四人は既に嫁ぎ、長子は現国王陛下、次男は確か優秀な武官として近衛騎士になって王宮にお仕えしているはず。末子の三男は有能な歴史学者に……って、まさかフロレスタン室長！？

「えっ学者が本業だったんですか？ いや本業は王族？」

蔵書管理の傍ら研究をしているのかと思っていたけど、むしろ研究がメインだったの？

それよりなにより、王族にイメージする華々しさというものを全く持ち合わせていないフロレスタン室長……いや、フロレスタン王弟殿下にびっくりなんですが。

「昔からそんなに暗い性格だったんですか？」

「……相変わらず齒に衣着せぬ物言いだな。

確かに書物好きは昔からだったが、暗いと言われたことは無かったので気づかなかったのやもしれぬ」

華やかな兄妹に囲まれているうちに影が薄くなっただのか、と想像してしまう。根暗な雰囲気は、持って生まれたものなのか？ 後天的なものなのか？

それを指摘してくれる存在はいなかったの？

その疑問にはあとでレスター中將から、教育係に変人が多くてあんなっちゃったんだよ、雰囲気はともかく基本的な性格はそれほど変わっていないし、色々な要素を含めてそれがグレイらしさだと認め合っている。家族仲はかなり良い方だと思うよ、と肩をすくめて答えてもらうことになるんだけど、この時のわたしはそんなこと知らない。

わたしの頭に浮かんだのは、煌びやかな王宮の中でみそつかすにされる幼い室長の姿。

身分の差なんて関係ない。仲間はずれが寂しいのは万人共通のはずだ。

失恋して傷つくのが万人共通であるように。

「……………わたし、王弟殿下という身分でなくても、禁書庫に入れなくても、フロレスタン室長のこと尊敬してます」

「……………」

「でも、わたしにとって結婚って、好きあった男女がするものなんです。フロレスタン室長が、あの、何故わたしなんか結婚を申し込んでくださるのか」

「そなたを好きだからに決まっておる」

「わわわわ、そんなストレートに言われると恥ずかしいですから！

あー、ありがとうございます。ご好意は嬉しいです。

でも……………なんていうか、わたしの気持ちはそこまで高まっていらないというか……………人として尊敬はしているんですけど、結婚の申し込み

をお受けできるほどではないんです」

だからごめんなさい、と頭を下げる。
やや間があつて、室長は口を開いた。

「人として嫌悪感が無い上、根底にあるのが尊敬の念なのであれば、それはいずれ変化する可能性は十分にあるのではないか？」

「へ？ はあ、一般的には、そうかも……？」

この口！考えなしに言葉を乗せてしまうこの舌！

相手が言質をとる名人だと薄々わかつていたくせに、何故うかつにも一般論など口にしたのか。

ふつと笑つたような空気に、反射的に室長の顔を見ると、なんとも忌々しいしたり顔で、口の端を上げていた。微笑んでいる、と言ってもいいが、それにしておどろおどろしい雰囲気で。

「では、わたしがそなたを諦める必要性は全く無いわけだな？」

「はい？」

「そなたの気持ちが高まるよう、努力を続けることにする」

はああ？何故そうなる！

そうして一般論という大いなる味方を手にしたフロレスタン室長は跪いたまま恭しくわたしの指先に口付け、ようやく立ち上がった。

「これほどの好条件が整っているのに退くわけにはいかぬ」

「は!？」

「待っている。惚れさせてみせる」

「はいいいい!!??」

わたしの困惑など無視した決意を高らかに宣言し、フロレスタン室長はきびすを返した。啞然としたわたしを書架脇に置き去りにしたまま。

こうして、わたしとフロレスタン室長の間で不毛な攻防が始まる…
…はずだった。

……異性として意識しはじめたことによって、特に猛攻を受けるまでもなくあっけなくわたしが陥落してしまうまで、3ヶ月もかからなかったのは、また別の話。

その6（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4289u/>

ぬばたまの求婚

2011年6月29日00時11分発行